

#### 4.1 スカラーの勾配

座標  $x, y, z$  の関数  $f = f(x, y, z)$  が与えられた場合, 点  $(x, y, z)$  における  $f$  の勾配 (gradient) は以下のように定義される.

$$\text{grad } f \equiv \frac{\partial f}{\partial x} \mathbf{e}_x + \frac{\partial f}{\partial y} \mathbf{e}_y + \frac{\partial f}{\partial z} \mathbf{e}_z. \quad (4.1)$$

ここで  $\mathbf{e}_i$  は  $i$  方向の単位ベクトルである. grad はグラジエント, もしくはグラッドと発音する. (4.1) はハミルトンの演算子

$$\nabla \equiv \mathbf{e}_x \frac{\partial}{\partial x} + \mathbf{e}_y \frac{\partial}{\partial y} + \mathbf{e}_z \frac{\partial}{\partial z}$$

を用いると

$$\text{grad } f = \nabla f$$

と表される.

- (1) 固定点 P から一定の微小距離  $dr$  だけ離れた点 Q がある. 点 P から Q へ移動した際の関数  $f$  の変化が最大となるのは, ベクトル PQ が点 P における  $\nabla f$  に平行な場合であることを示せ (ヒント: ベクトル PQ を  $d\mathbf{r} = \mathbf{e}_x dx + \mathbf{e}_y dy + \mathbf{e}_z dz$  としてみよ).
- (2)  $\nabla f$  は  $f = \text{一定}$  の面 (これを等位面と呼ぶ) に垂直であることを示せ.
- (3)  $g$  を  $f$  とは異なるスカラー関数とする場合, 以下の式が成り立つことを示せ. ただし  $\alpha, \beta$  はスカラーとする.

$$(i) \nabla(\alpha f + \beta g) = \alpha \nabla f + \beta \nabla g$$

$$(ii) \nabla(fg) = g \nabla f + f \nabla g$$

$$(iii) \nabla \left( \frac{g}{f} \right) = \frac{f \nabla g - g \nabla f}{f^2}$$

$$(iv) \nabla f(g) = \frac{\partial f}{\partial g} \nabla g$$

- (4) 原点 O に対する点 P の位置ベクトルを  $\mathbf{r}$ ,  $|\mathbf{r}| = r$  とする. このとき以下の式が成り立つことを示せ. ただし  $\mathbf{e}_r$  は  $\mathbf{r}$  方向の単位ベクトルとする.

$$(i) \nabla r = \frac{\mathbf{r}}{r} = \mathbf{e}_r$$

$$(ii) \nabla \frac{1}{r} = -\frac{\mathbf{r}}{r^3} = -\frac{1}{r^2} \mathbf{e}_r$$

$$(iii) \nabla r^m = m r^{m-2} \mathbf{r} = m r^{m-1} \mathbf{e}_r$$

## 4.2 ベクトルの発散

各成分が座標の関数となっているベクトル

$$\mathbf{A} = a_x(x, y, z)\mathbf{e}_x + a_y(x, y, z)\mathbf{e}_y + a_z(x, y, z)\mathbf{e}_z$$

を考える (このとき  $\mathbf{A}$  をベクトル場と呼ぶ).  $\mathbf{A}$  の発散 (divergence, ダイバージェンス) は以下のように定義される.

$$\operatorname{div} \mathbf{A} \equiv \frac{\partial a_x}{\partial x} + \frac{\partial a_y}{\partial y} + \frac{\partial a_z}{\partial z}. \quad (4.2)$$

(1)  $\varphi = \varphi(x, y, z)$  をスカラー関数とすると,

$$\operatorname{div} \cdot (\varphi \mathbf{A}) = (\operatorname{grad} \varphi) \cdot \mathbf{A} + \varphi \operatorname{div} \cdot \mathbf{A}$$

となることを示せ.

(2) スカラー関数  $\varphi$  に対し,

$$\operatorname{div} (\operatorname{grad} \varphi) = \frac{\partial^2 \varphi}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 \varphi}{\partial y^2} + \frac{\partial^2 \varphi}{\partial z^2}$$

となることを示せ.

$\operatorname{div} (\operatorname{grad} \varphi)$  は  $\nabla \cdot (\nabla \varphi)$ ,  $\nabla^2 \varphi$  等とも表す. とくに  $\nabla^2$  を記号  $\Delta$  で表し, これをラプラス演算子と呼ぶ.

(3) 3次元空間内の定常な流れを考える. このとき空間内の各点の速度場は  $\mathbf{v}(x, y, z)$  で与えられる. 流れ場中に空間内のある一点  $P(x, y, z)$  を頂点にもち, 角辺が  $x, y, z$  軸に平行でその長さが  $(dx, dy, dz)$  である微小直方体を置く. この直方体から単位時間に流出する流体の総体積は, 近似的に

$$(\operatorname{div} \mathbf{v})_P \times dx dy dz$$

と表されることを示せ. ここで  $(\operatorname{div} \mathbf{v})_P$  は点  $P$  における  $\mathbf{v}$  の発散を表す.